

靈想録

チャップマン名言集

●ロバート・チャップマン 著

●北村 正 訳

ROBERT C. CHAPMAN

CHOICE SAYINGS

チャップマン名言集

霊想録

●ロバート・チャップマン 著

●北村 正 訳

はじめに

「キリストを宣べ伝える人は多いが、キリストを生きる人はそれほど多くはない。これからの私の大きな目標は、キリストを生きたることである」。これが、R・C・チャップマンがみことばの働きのために神に召された時の言葉であった。そしてこの言葉の通り、彼は実際に七〇年以上にわたってキリストを生きた人であつた。

本書はそのチャップマンの霊想の記録であり、彼の現存している聖書解説の覚え書きをまとめ、英国スコットランド、グラスゴウのゴスペル・トラクト・パブリケーションズ社から一九八八年一月に発行されたものである。チャップマンの長い実践的な信仰生活から得られた、含蓄のある精選された言葉が、「キリストを生きる」とはどういうことかを具体的に示している。また、私たちの信仰生活にとつて励ましとなる言葉が随所に見られるが、項目毎にまとめられているので、どこから読まれても、また、今、実際に必要なところから読まれても、参考になると思われる。

翻訳にあたって、著者チャップマンの意図をどこまで伝えることができたか、甚だ疑問であるが、神が本書を祝用してくださり、読者に多くの励ましを与えてくだされば幸いで

ある。

また、未筆ながら、本書の日本語訳出版の許可を快く与えてくださったゴスペル・トラクト・パブリケーションズ社に謝意を表するとともに、この翻訳の機会を与えてくださった野城喜代治兄に深く感謝する次第である。

一九九三年

北村 正

R・C・チャップマン 霊想録 目次

はじめに	
一 福音	1
二 律法と福音	4
三 聖書	7
四 生まれながらの人間とその宗教	11
五 罪	14
六 罪の告白	20
七 良心	25
八 キリストの十字架	30
九 人間の本性	36
一〇 信仰	41
一一 神との交わり	50

一二	キリスト	59
一三	キリストと教会	63
一四	聖霊	69
一五	キリストの模範	71
一六	信仰の試練	73
一七	教会の召命	82
一八	新しく造られた者	87
一九	不信仰	89
二〇	信者の罪	93
二一	主の再臨	97
二二	祈り(一)	98
二三	戦い	104
二四	務め	106
二五	キリストに対する務め	109
二六	赦し	110
二七	心の貧しさ	112

一 福音

聖霊によつて心に罪の意識が与えられ、罪人がもらす最初のため息、それがまさに神との永遠の交わりの始まりである。

福音を聞いている人々の中で、神が記憶にとどめられる罪は、イエスの血に心を留めない人々の罪だけである。

もし、神がキリストの上に栄光を置いておられるならば、私たちがそのお方に自分たちの救いの希望を抱くのは当然ではないだろうか。

私たちは自分自身の義をたてることを心から放棄しているだろうか。そして神に義と認められ、聖められるために、キリストの贖いの血だけに頼っているだろうか。もしそうだとすれば、私たちは恵みによつて救われた哀れな罪人である。

「悔い改めよ」という神の命令そのものが、律法を越えた神の摂理を表わしており、神の心の中に恵みという泉があることを意味している。もし神から与えられる赦しがないな

らば、悔い改めよという命令も与えられなかったことであろう。

神の義は、かしらなるキリストを罪に定め、十字架にかけることによって栄光をお受けになった。同様に、その同じ義は、クリスチャンが救われることによって栄光をお受けになる。

生まれながらの人間は福音を理解する力がない。そして「私は何をなすべきか」という叫びを絶えず繰り返す。人間は自らのわざは完べきに行なってきたが、それはまさに自己破壊のわざである。そしてひたすら悪に走り、全く滅びに向かっている。それだからこそ、人間は神の福音の対象としてふさわしいのである。

不信仰とは、不遜の極みのことである。不遜の極みとは、分かりやすく言えば、神が愛してくださる原因ともいえるべき良いものが多少なりとも被造物の中にあるだろうと捜していることである。しかし、そのようなものは決してあるはずがない。

キリストの血が心に振りかけられることなしに、神を我が父と呼ぶ人間の好き勝手な礼拝、それが神に対して罪人が犯す侮辱の罪の最たるものの一つである。

どんな毒の杯も、律法と恵み、行ないと信仰が混じり合った杯ほどは致命的ではない。この杯は、神の恵みの福音によってではなく、偽教師によって与えられるものである。しかし、残念ながら、人々は、自分の心を満足させようとして、その杯を喜んで受け、また、しきりに飲みたがる。

キリストの血によってではなく、様々の義務を果たすことによって、たましいが癒されることを求めることは、病を治すために毒を飲むようなものである。

